

母親の育児感とその関連要因

医学部保健学科 地域・精神看護学講座 (矢倉紀子)

矢倉紀子, 原口由紀子, 松浦治代, 笠置綱清

A Study of the Feeling to the Child Care of the Mother and the Relevant Factors

Noriko YAKURA¹⁾, Yukiko HARAGUCHI¹⁾, Haruyo MATSUURA¹⁾,
Tsunakiyo KASAGI²⁾

¹⁾ *Department of Environment and Mental Health Nursing, School of Health Science,
Faculty of Medicine, Tottori University, Yonago 683-0826, Japan*

²⁾ *Department of Women's and Children's Family Nursing, School of Health Science,
Faculty of Medicine, Tottori University, Yonago 683-8053, Japan*

ABSTRACT

In K town, Tottori Prefecture, we conducted the questionnaire investigation of the mothers who have the children of the age between two and 15 analyzed clearly both the actual state of the mothers' feeling to the child care and the relevant factors by which the mothers' feeling of child care are affirmative and can enjoy it. Our investigation showed that about 40% out of the mothers enjoyed child care, and analyzed the relevant factors from the attributes of the mothers, the child care support by the husband, and a mother-child relationship. The relevant factors about whether or not the mother can enjoy child care were little associated with the age of the mother, the existence or non-existence of the occupation of mother, the family form, the gender role consciousness, and the age and the gender of the child, it depended on whether or not the mother herself are able to relax fully. Then, by the relation with the child care support by the husband, the group that the child care support by the husband was higher, the husband and wife discussed well child care and the husband, not being aggressive support, appreciated to the wife sufficiently acknowledged the feeling to child care of the mother. Also, to talk with among the mother and child made the feeling to child care of the mother affirmative.

(Accepted on September, 2001)

Key words : child care support by the husband, feeling to child care of the mother, child care, mother, child

はじめに

厚生省のキャンペーンでも『育児に参加しない父親は父親とは呼ばない』と訴えるなど、母親の就業率の向上や子どもの健全育成のうえから子育てを夫婦で行うことが強調され、そのことにより母親の育児不安が軽減でき、育児への自信につながるなどの有効性が確認されている¹⁻⁸⁾。しかし、その一方では、従来の日本型性別役割に従い母親のみが育児を行い、必ずしも父親の育児参加が定着しているとはいえない現状である。育児の楽しさを実感し意義あるものと認識できる母親が半減し、反対に育児はストレスフルなものであると感じ、孤立感をもつ母親が増加していることが指摘され^{1,9-10)}、少子化の危機感もあり子育てを支援する社会システムとして構築する努力が続けられている。また、これまでの育児感に関する研究は、ほとんどが乳幼児を持つ母親を対象としたものである。

このような現状を踏まえ、鳥取県K町において、「安心して子どもを産み育てられる町づくり」を目指し、総合的な母子保健施策のための基礎資料を得る目的で調査が開始された。そのなかで、母親の子育て感の実態と母親が子育てを肯定的に捉え、楽しみながら子育てのできる関連要因を検討した。

対象および方法

鳥取県西部のK町において、1歳6カ月から中学生の小児のいる622家庭（うち、父親のいない家庭15、母親のいない家庭5）の父親・母親に対して、育児観や育児状況に関するアンケート調査を留め置き法により1998年5月に行った。アンケートの内容についてはK町母子保健連絡会で検討し、K町保健委員を通じて配布・回収した。この母子保健連絡会は保健福祉課、教育委員会、町内小中学校養護教諭、保育所の保育士、歯科医師、小児科医師（大学医学部）、保健所、主任児童委員、住民代表、著者らにより構成され、K町の母子保健事業を企画検討するものである。

分析対象は、第1子が該当年齢である母親についてのみ対象とし、有効回答数は444名中397名（89.4%）であった。母親の年齢は、30歳代が最も多く65.5%、次いで40歳代が20.9%、20歳代が11.6%であり、職業は常勤務者が最も多く40.6

%、次いでパート19.4%、無職18.6%、自営と農業を合わせて8.8%であった。また、家族形態は核家族率が39.3%であった。小児の年齢内訳は幼児108名、小学生186名、中学生103名であった。

統計解析は χ^2 検定、スピアマン順位相関係数を用いた。

結 果

1. 母親の育児感

本研究においては、育児感を、「日常母親が子育てに対して感じている全体的な気持ち」と定義し、その気持ちを「大いに楽しい」、「楽しい」、「普通」、「楽しくない」に分類し、最も自分の気持ちに近いものを選択させた。その結果、「普通」と回答したものが約半数を占め、「大いに楽しい」、「楽しい」を合わせた育児を積極的に楽しんでいる群は40.5%であった（図1）。

2. 母親の実感する父親の育児参加度

母親が実感している父親の育児参加の程度を「大いに参加する」、「まあまあ参加する」、「あまり参加しない」、「全くしない」の4段階で評価させたところ、「まあまあ参加する」が最も多く41.8%、次いで「大いに参加する」32.2%と2/3以上が何らかの参加はしていたが、1/3はあまり参加していない実態が明らかとなった（図2）。

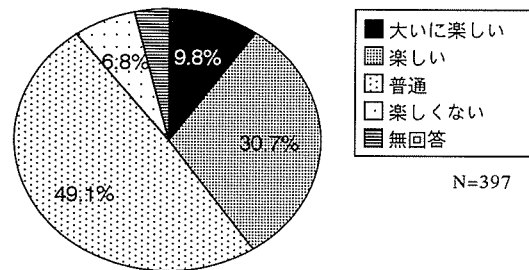


図1 母親の育児感

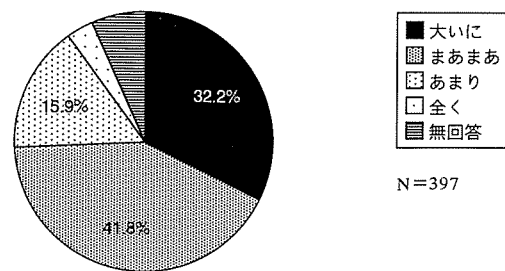


図2 母親の実感する父親の育児参加度

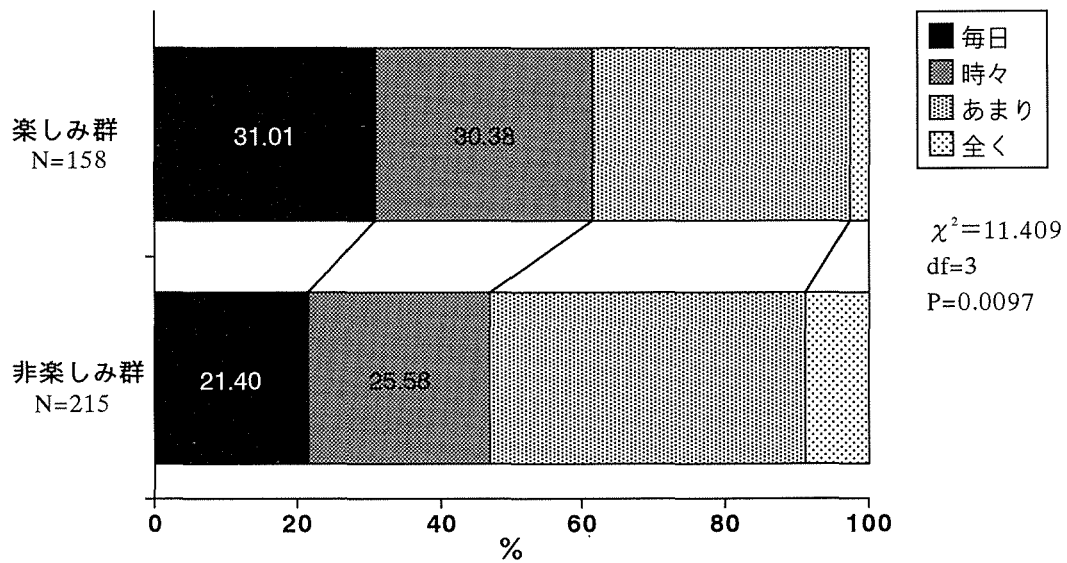


図3 母親の育児感とくつろげる時間

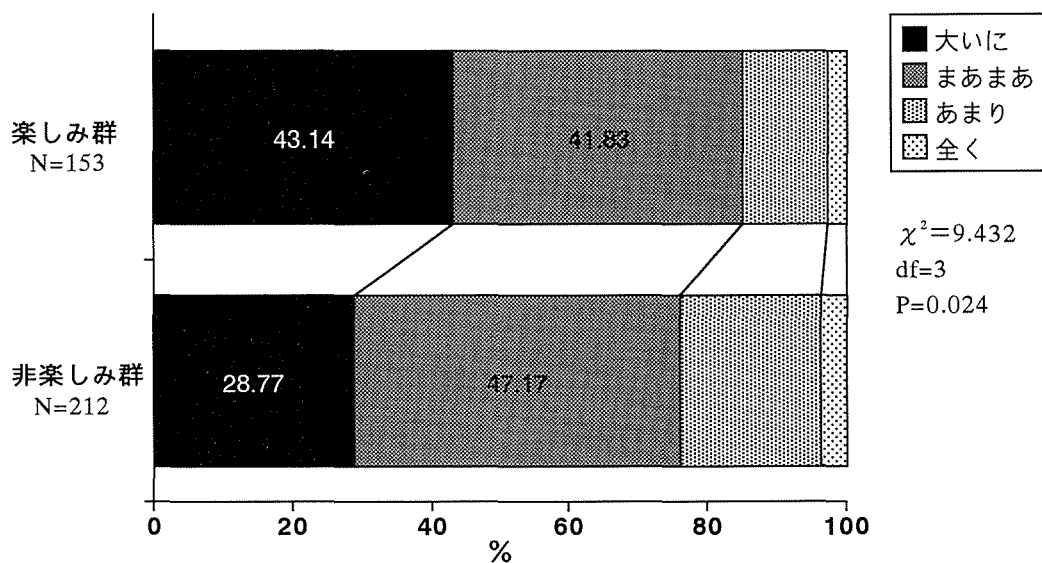


図4 母親の育児感と父親の育児参加度

3. 母親の育児感に関連する要因

前述の子育てに対する気持ちを「大いに楽しい」、「楽しい」と回答したものを「楽しみ群」、それ以外の回答者を「非楽しみ群」の2群に区分し、以下にそれらに関連する要因について検討した。

1) 母親自身の属性との関連：母親の年齢、職業の有無、職種、家族形態とは有意な関連性は認められなかった。関連性が認められたのは、母親自身に日々の生活の中で、ゆったりと安らげる

時間があるか否かであり、「楽しみ群」が有意 ($\chi^2 = 11.409$, $df=3$, $P=0.0097$) にゆったりと安らげる時間が多い傾向にあった(図3)。また、母親が「男は仕事、女は家庭」をどう考えているかという性別役割意識については、「楽しみ群」と「非楽しみ群」の間に有意差は認められなかった。

2) 夫の育児支援との関連：前述した父親の育児参加度を「楽しみ群」、「非楽しみ群」で比較すると、「楽しみ群」に父親の育児参加度の高いこ

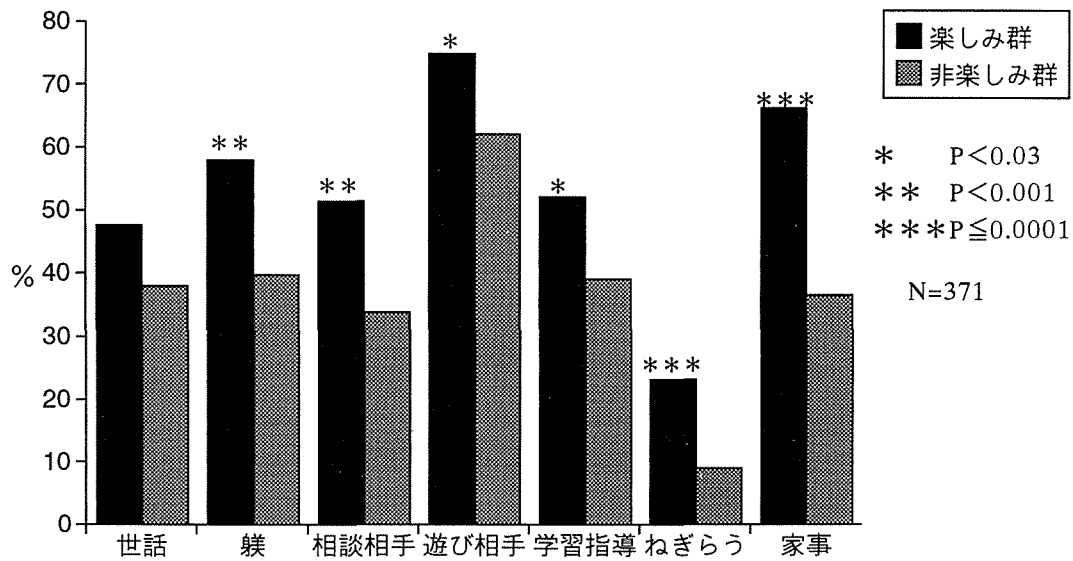


図5 母親の子育て感別父親の育児・家事参加率

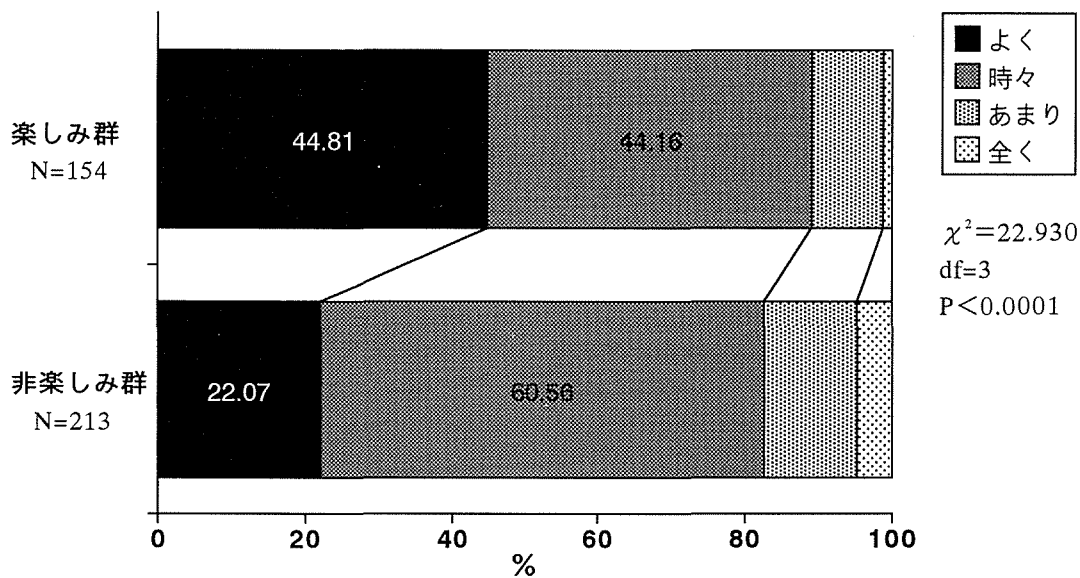


図6 母親の育児感と夫婦間の話し合い頻度

とが明らかとなった ($\chi^2 = 9.432$, $df = 3$, $P = 0.024$) (図4).

さらに、夫の育児支援の内容を、「子どもの世話をする」、「躰をする」、「妻の相談にのる」、「子どもと遊ぶ」、「学習の面倒を見る」、「妻へのねぎらいの声かけをする」、「育児以外の家事を分担する」の7項目を示し、それを父親が実施していると母親が評価している者の割合を、両群間で比較した。

「子どもの世話をする」以外のすべての項目で

「楽しみ群」の実施率が有意に高く、とくに「妻へのねぎらいの声かけをする」、「育児以外の家事を分担する」の2項目では顕著な差が認められた(図5).

また、夫婦間での育児についての話し合いの頻度を両群間で比較すると、「楽しみ群」にその頻度の高い者が有意に ($\chi^2 = 22.930$, $df = 3$, $P < 0.0001$) 多いことが認められた(図6).

3) 父親の育児感との関連性：母親の育児感と父親の育児感の相関関係をみると、スピアマンの

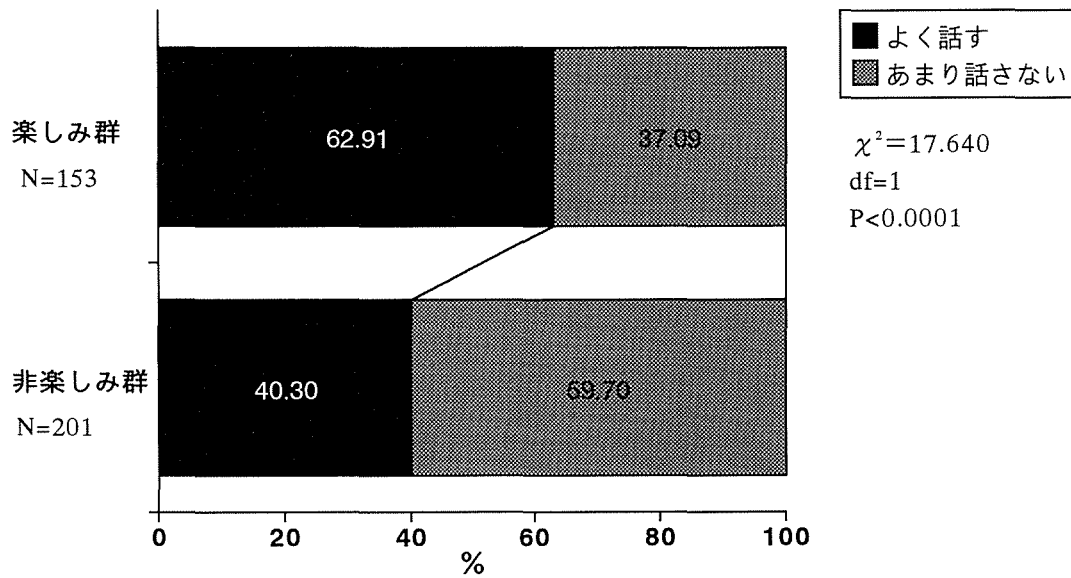


図7 母親の育児感と子どもとの話し合い頻度

順位相関係数=0.212, $N=304$, $P=0.0002$ を示し、ごく弱い相関関係が認められた。なお、この相関関係を幼児群、小学生群、中学生群別に検討したが、年齢的な顕著な差は認められなかった。

4) 小児との関連：小児の年齢を幼児、小学生、中学生に区分して、「楽しみ群」、「非楽しみ群」の比率を比較したが、有意差は認められず、また性別とも関連性は認められなかった。

さらに、母親が日常小児とよく話すか否かの割合を両群間で比較した。「よく話す」と回答した母親は、「楽しみ群」62.9%、「非楽しみ群」40.3%であり、有意に ($\chi^2 = 17.640$, $df = 1$, $P < 0.0001$)「楽しみ群」に親子間で話し合っているものが多かった(図7)。

考 察

本研究の対象者の年齢は、幼児から中学生までとかなり幅がある。結果をまとめるにあたって年齢的に分析したところ、母親の育児感と年齢との間に有意な差を認めなかったため、年齢的区分はしないで考察を進める。

子育てに伴う母親の感情は、小児の成長に対する驚き、喜び、楽しさなどの肯定的感情とともに、不安や、負担感、孤立感などの否定的感情も併せもつものであるが、両者の感情の比率や強さは母親を取り巻く育児環境により左右されると考えられる。近年、育児困難感をもち、育児を楽し

めない母親が増加していることが報告されている^{1,9-10)}。

本調査結果における育児を楽しんでいる母親の割合は、10年前に森田ら¹⁰⁾が行ったものとはほぼ同程度であった。子育ては肯定的感情が否定的感情より優位な状態で行うことが重要である。このような環境をいかに創っていくかが今問われており、その対策として、社会的なシステムをどう構築するかの試みが多数なされている。

一方、フォーマルな支援システムの構築ばかりでなく、母親自身の意識、あるいは父親の育児参加、子どもとの関連を分析し、インフォーマルな側面からの育児支援を明確にしていくことも必要である。

今回の調査では、母親の年齢・職業の有無や職種、家族形態と育児感の間にはほとんど関連性は見い出せず、このような属性でくくり考えること自体がすでに意味を失ってきていることが明らかとなった。この背景には、女性の高学歴化に伴い就業することが一般化してきたことや、三世代家族であってもかつての世代間の影響力がなくなり、家族としての育児力が弱体化してきていることが考えられる。したがって、育児支援を考える場合には、もっと家族の有り様や、職場環境の詳細にまで踏み込まなければならないことを示唆するものであろう。また、本調査では年齢については対象者の80%以上が30~40歳代で、意識に差

を認めるほどの年齢差でなかったためと考えられる。このような傾向は他の報告¹¹⁾でも認められた。

また、性別役割意識とも関連性が認められなかった。このことはゆったりとくつろげる時間をもっている母親に育児を楽しんでいるものが多いことと考え併せると、たとえ育児を100%母親の役割であると認識していても、育児を楽しむためにはそれ以上に母親自身に精神的、肉体的にゆとりが必要であることを示唆するものである。

父親が育児に参加することの有効性を示した研究は多く^{1,9-14)}、厚生省の研究班でも早くから取り上げ検討されてきた¹¹⁾。それらの成果に基づいて「育児に参加しない父親は父親とは呼ばない」のキャッチコピーが作られ、積極的に父親への育児参加が呼び掛けられた。また、社会教育も父親に乳児の入浴、抱き方など育児技術を教育する機会が設けられたり、父親の育児参加をやすくするための法制度の整備もなされ、育児に積極的に参加する父親が確実に増加している¹⁴⁻¹⁶⁾。その一方で、前述したように育児を楽しめない母親が増加しているが、この状況を考えると、母親が育児を肯定的に捉えられる育児環境は父親の育児支援のみでなく、もっと多方面からのアプローチが必要であることを裏付けるものであるが、本研究結果からはそれらを明らかにすることはできなかった。

父親の育児参加のあり方について若干興味ある結果がでているので、その点について考察を加えたい。母親が実感している父親の育児参加度が高い程、育児を楽しむ母親が多いことが明らかとなった。これはこれまでの多くの研究^{1,7,10-11,14)}でも示されており、納得できる結果である。肯定的感情に関連する要因として夫婦間で話し合いがもたれたり、ねぎらいの声かけや家事に協力するなどの相手を思い遣る夫の行為が、とくに妻の肯定的育児感を強め妻の負担感、孤立感を感じさせなくし、このような結果につながったといえる。これは、直接的な支援以上に夫婦が共同で子育てをしているという一体感を持つことの重要性を示唆するものである。このことは、小児の年齢が高くなればなるほど重要となる。遊び相手になったり、学習の面倒をみたり、しつけをするなど直接小児の世話をすることも、肯定的感情と関連していたが、これは夫の直接的な世話が妻の時間的ゆ

とりを生み出すことになり、併せて負担感、孤立感を減らし、肯定的感情へつながったものとも推察できる。

これらの結果を考えると、夫婦間の育児感はある程度相関しているものとも推察できるが、実際には弱い相関関係しか認められず、その理由は今回の調査結果からは明らかにすることはできなかった。子どもとの関係でも、夫婦間と同様に母子間のコミュニケーションのよさが母親の育児感を肯定的にすることが明らかとなった。このことは小児の健全育成の基本かつ重要なことであり、母親に肯定的育児感を持たせることの重要性が再確認された。

結 語

母親が育児を肯定的にとらえ、楽しみを実感できる育児環境を維持するためには、夫の子どもへの直接的な世話に限らず、夫婦で共同して子育てをしていることが実感できる育児参加を促すことの有効性が明らかとなった。

文 献

- 1) 川井尚. (1992) 育児における父親の役割. 小児保健研究 51, 671-680.
- 2) 大藪泰, 前田忠彦. (1997) 乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因—父親の仕事中心志向と家庭中心志向の効果—. 小児保健研究 54, 54-60.
- 3) 牧野カツコ. (1982) 乳幼児を持つ母親の生活と<育児不安>. 家庭教育研究所紀要 3, 34-56.
- 4) 田戸静. (1987) 育児不安への対応. 周産期医学 17, 909-912.
- 5) 加藤忠明. (1987) 子育ての科学 育児不安. 小児科診療 50, 2-76.
- 6) 熊井利広, 佐伯裕子, 黒田由香. (1999) 育児不安と父親の育児参加の関連『子育ての社会的支援に関する意識調査から』. 日本小児保健学会講演集, 126-127.
- 7) 岡島かおる, 荒井扶美枝, 稲垣美佐, 伊藤美紀, 小澤尚子, 關悦子, 中野和見, 長野未織, 前田清美. (2000) 母性意識の世代間に関する研究, 福岡県立看護専門学校看護研究論文集 23, 93-103.
- 8) 坂間伊津美, 山崎喜比古, 川田智恵子. (1999)

- 育児ストレスの規定要因に関する研究 46, 150-261.
- 9) 横井茂夫, 森田英雄. (1994) 父母参加の乳幼児健診における小児科医としての実際的対応. 厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」平成6年度研究報告書, 128-131.
 - 10) 森田英雄, 浜田文彦, 倉繁隆信, 奥原義保, 北添康弘. (1990) 母親が育児を楽しむための父親の役割, その他の因子の検討. 厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究」平成2年度研究報告書, 334-342.
 - 11) 西脇京子, 清水絵里子. (1997) 母親が子育てを楽しむための要因について. 第44回日本小児保健学会講演集, 108-109.
 - 12) 渋井展子, 加我牧子, 白井泰子, 山本正生. (1996) 乳幼児期における父親の育児実態とそれに対する母親の評価. 第43回日本小児保健学会講演集, 108-109.
 - 13) 石井京子, 藤原千恵子, 日隅ふみ子. (1998) 父親としての意識の発達に及ぼす養育行動の分析. 小児保健研究 57, 767-772.
 - 14) 篠原ひとみ, 伊藤加奈, 戸守美絵, 江幡芳枝. (2000) 保育園児(0・1歳児)をもつ母親の育児に関する実態調査. 第47回日本小児保健学会講演集, 280-281.
 - 15) 荒賀直子, 木矢村静香, 服部律子. 母親への育児支援に関する一考察. 第47回日本小児保健学会講演集, 288-289.
 - 16) 柴本淑子, 巷野悟郎, 植松紀子, 伊藤直美. (2000) 若い父親はどこまで育児をしているか. 第47回日本小児保健学会講演集, 274-275.